

森本 あんり 著

「異端」というと、われわれはすぐに「異端審問」を想起し、宗教世界の問題と思いがちである。本書においても、キリスト教の歴史で問われてきた異端が、その正統との関連で論じられている。しかし、著者のもくろみは、正統と異端を宗教の次元で論じようとするところにはない。著者はこの問題を媒介として、「現代政治の本質をどう理解すべきか」を考えようとしたのであり、本書は広い視野によってなされた、きわめて今



日的な政治論である。

著者はキリスト教の歴史における「正統と異端」の対立関係を見ていねいにたどり、そのなかから両者の本質を探り出す。

「宗教における正統の発生と展開を参照枠として、政治や文化における正統と異端の生息を問う」というのが著者の方法である。そのために堀米庸三のキリスト教史、丸山真男の政治学が、肯定的にまた批判的に検討される。その作業によって、「正統」は「人びとがその権威をおのずと承認せざるを得ないような何ものかである」と定義

## 現代政治の本質を考える

評論家 宇波 彰 評

される。正統は多くの人が認めていることによって成り立つものであり、そのような意味での「正統」からはじき飛ばされたものが「異端」とされる。

ところが現代では、ひとびとがその権威を認める「正統」は腐食し、一時的に異を唱える「なんちゃって異端」が増加している。そのため「異端だらけの時代」が到来したのである。

「正統」が消失したので、「異端」も不明確になる。このような時代にあつて、著者が求めるのは、宗教学者ティリヒから借りてきた「全体の部分として生きる（個人の）勇氣」という考え方である。「個と全体を統合する勇氣は、自己を超えた存在に与ることによってのみ得られる」と、著者は終章で主張する。本書は政治論でありながら、最終的には「個人を超える存在」を求め、哲学的・宗教的な位置が固く守られる。著者の強い信念を感じさせる印象的な結論である。

（岩波新書 860円）



もりもと・あんり 1956

年神奈川県生まれ。国際基督教大学（ICU）学務副学長、同教授。専攻は神学・宗教学。近著に『反知性主義——アメリカが生んだ「熱病」の正体』（新潮選書）など。